

食は神学の課題となるか

植木 献

食べる存在としての人間の救済を中心課題とし、2015年度のスコットランド、エディンバラ大学神学部での在外研究の成果報告を行なった。

身体を持ち、食べる存在である人間のあり方についての研究は、近代以降教義学的に十分な検討が行われていない。けれども、救済史の観点から考えると、人は自然の恵みの余剰を労働を持って食べるように創造されたが、木の実を食べたことで連帯性を失い、孤立・分裂の罪の世界に入る。そこでは食物が木の実から労働によって口にするパンへと変化する。そして十字架上で裂かれたキリストの肉を食べ血を飲むことで罪赦され、キリストのからだに結び付けられる。終末には和解と統一のもとに置かれ「からだのよみがえり」へと導かれるというプロセスを辿るが、要所において、「食べること」「身体」が重要な位置を占める以上、検討が必要である。

第二次大戦以降、文化人類学や社会学では「食べること」「身体」が主要な論点となったが、神学では2005年頃から環境の神学の延長線上の課題として論じられるようになってきた。ゴリンジ『収獲』2006年、ワーツバ『食物と信仰』2011年、グラメット&ミュアース『メニューの神学』2010年、メンデズ=モントヤ『食物の神学』2012年などが問題意識を共有する研究である。

ゴリンジ、ワーツバらは、エコロジーの神学から和解と赦しの象徴としての食卓へと議論を進め、創造論から聖餐論へ至る論理を整理する。一方グラメット、メンデズ=モントヤらは聖餐論から聖霊論へ至る論理を重視し、食べることによる身体の変容、つまりキリストのからだとしての教会と個人の身体の変容に注目する議論を展開する。

本発表では、後者の議論に着目し聖霊の創造的革新力への信仰を重視する。それは食の霊性、すなわち「食べ物が与えられる。感謝と配分がなされる」ことが教理的にも実践的にも今日求められていると理解するからである。食の霊性は他宗教との共存の基盤、そしていのちと食べ物と労働の関わりを生み出す。その先駆的な40年以上にわたるアジア学院の働きが生み出した“foodlife work”を真摯に検討する必要がある。

人間の欲望により変容した大地・世界と向き合う苦しみは、発想の転換のような観念的な操作では果たし得ない。解決には食べること、また食べるための労働を通して私たちの身体が変えられていく必要がある。

食べることで自由と力が与えられることを宣べる神学が要請されることを本発表の暫定的な結論とし、発題を発展させていきたい。